

第1章 虜囚の処女肛辱

「う……」

初めに感じたのは、頭の中でわんわんと反響する、五月蠅いほどの耳鳴り。重い頭は寝不足の時のように鈍く痛み、軽い吐き気すら催すほど。

頬のあたりにもなにか、薬品のような匂いが漂う。

(なに……?)

何かの異常を感じていながら、それがなんなのか分からない、もどかしさ。度忘れのしたときのような不快感がある。

そうして有希子は、ようやく——自分の視界が何も捕らえていないことに気付いた。いくら目を凝らしても、何一つ見えない暗所——

否。

(え、……な、なに、これ……)

こめかみに感じる、太い帯のような分厚い布地。それがしつかりと髪の上から後頭部まで巻き付いて、有希子の視界を塞いでいる。それだけではない。耳奥にも柔らかな栓のようなものが押し込まれている。

部屋が暗いのではない。目隠しによって視界を塞がれているのだ。あわててそれを剥ぎ取ろうとした有希子だが——そうしてようやく彼女は自由にならない自分の手に気付く。

両手は手首に頑丈なベルトのようなものが巻き付けられ、頭の上に固定されていた。

「ちよ、ちよつと!？」

さしもの有希子も声を上げてしまう。しかし、耳栓に封じられた耳にはその声は届かず、まるでどこか遠くの喧騒のように響くのみ。

動揺とともに足をばたつかせた有希子は、さらに捨て置けない事実を認識した。

(は、ハダカ……!?)

有希子の身体はどうやらベッドか何かの上に横たえられているのだが、その背中が、肩が、足が、柔らかく自分を受け止めるベッドのシーツの布地を直接感じているのだ。胸や手足に感じる頼りなさの正体はこれだった。

(……………)

脚をもじつかせてみると、辛うじて——いちばん肝心な部分を覆う下着だけは残されていることが分かる。

だが、そんなものは些細な問題でしかない。背筋を這いあがる寒気に、むき出しの二の腕には鳥肌が立った。

裸に剥かれて、目隠しをされ、耳も塞がれ、さらには腕まで縛られ、ベッドの上に転がされている——有希子の早熟な知識は、否応なしにひとつの結論をはじき出してしま

う。
(待つて……待つてよ、なによ、これ……つ)

混乱しそうになる思考を必死に落ち着かせ、現状を把握しようとしたその時。

有希子は、肌に向けられた誰かの視線を強く感じた。

ベッドの上で仰向けにされ身動きすら自由に取れない自分の身体に、ねとりと絡みつくような気配。それに錯覚とは思えない生々しさを感じ、少女の喉がひゅ、と小さく音を立てる。

「だ……だれか、いるの……？」

塞がれた耳の奥では、自分の絞り出した声すらも掠れて小さく、あまりにもか弱い。

だから、その問いかけに答える相手が居たとしても、有希子に聞き取ることはできなかった。

前触れもなくぎし、と身体が沈む。

——いや、沈んだのはベッドのほうだ。自分以外の誰かが、ベッドに乗っている。

(つ……!!)

突如、間近に迫ってきた未知の気配に身体をよじって逃れようとした有希子だが、そ

れよりも早く、闇奥から伸びた何者かの手のひらが、有希子の身体を押さえ込む。

「や……あ、つ、い、嫌ああ?!」

力強い手のひらは、叫び声を上げかけた有希子の口を塞ぎ、唇の中へと指を押し込んできた。太く力強い感触が、ぬるりと唾内へ入り込み、震えだした歯の間をしつかりと押さえこむ。

「んぐ、つ、う、う?!」

異物の侵入に軽い吐き気を覚えてえずいた有希子は、そのまま力強い気配に押さえつけられていた。身体のおちこちに重い何かが押し掛かり、拘束された少女の身体から、暴れる自由すらもが奪われてゆく。

そして――

(ひ、……あ……ツ!?)

一瞬、なにか別の生き物が身体に張り付いたような違和感を覚え、有希子は悲鳴を上げる。

だが、それもまた何者かの手のひらであることがすぐに知れた。

誰のものとも知れぬその手は、無遠慮に有希子の肌を撫で回し弄くり回してゆく。一糸纏わぬ裸の胸を、首筋を、薄く浮いた肋や尖った鎖骨までを擦り、乳首をつつき、更には下腹部へと這い降りて太腿をなぞり上げる。

反射的に内腿を閉じ合わせたものの、もはやそれで有希子の身体は完全に身動きが取れなくなつてしまった。膝から下にずしつと何者かが圧し掛かり、腕を頭上で拘束された有希子は、その身体の全てを無防備に晒してしまふ。

ほとんど膨らみのない慎ましやかな胸を、ほんのりと色合いの整つた乳首を、隠すもなく露わにされ、有希子は悲鳴を上げる。しかしその叫びすらも、塞がれた口の奥でくぐもつた声になるだけだった。

「ん、つく、ツ、む……っ」

少女が背筋に走る怖気に身を竦ませるのを樂しむかのように、有希子の身体を手のひらが撫でまわす。自分以外に誰にも触れさせたことのない場所を、くねる指が、滑る手のひらが撫で下り、その凹凸を確認するように動き回る。

強引に口を塞いだのとは対照的に、その指づかいはまるで、有希子の身体を品定めしているかのように執拗で、不気味なくらいに丁寧なものだった。

しかし、だからといって有希子がそれを許容できるはずもない。

「んう、あ、っ……むぐっ……」

髪を振り乱し首を振りたて、口を塞ぐ手を跳ね除けようとする有希子だが、まるで万力のような強い力で押さえ込まれた口は、有希子の些細な力での抵抗などではびくともしない。懸命に力を込める歯の間で、口内に押し込まれた指もぬるぬると滑るばかり。

そうしている間にも、もう一方の手のひらは二の腕から脇の下へとすべりこみ、細くくぼんだ腱をなぞって、鎖骨へと進む。そのまま左右の胸を交互に撫で回すように円を描き、かすかな膨らみを確かめるようにこねる。

(な、なにツ!? なんなの、これ——ツ)

有希子の意識は混乱の極みの中にあつた。自身を弄ぶ何者かの意図が掴めず、有希子は身体をよじって抵抗する。何かの思い違いではないか——と、都合のいい錯覚で片付けてしまいたくなる逃避の心を、直接、肌に触れる手のひらの感覚が断ち切つてゆく。

ささやかな膨らみを揉み込むようにこね回すの指先が、びん、と跳ね——

「ふあッ……!？」

突然きゆう、と胸の先端をつままれて、少女は口を塞ぐ手の下で声を跳ねさせる。

胸の先端への刺激は、痛みと痺れを合わせたような、不思議な感覚。胸の奥に鈍く感じる痛みの成分が、じんじんとした痺れに変わつてゆく。もともと、発展途上……どころか発展の兆しすら口クに見せない胸は有希子のコンプレックスでもあり、自慰の時もほんの少し、指先で撫でる程度のものだ。

けれど、ほんのわずかな柔肉をいとおしむ様に、浅いふくらみにそつと埋め込まれる指先は、有希子が自分でするよりも遥かに巧みに、快楽を引き出して行く。

(っ……や、やだ、やめてっ)

自分よりも、誰かも分からない相手のほうが、自分の身体を熟知している——その事実と、自分の身体が見せ始めた反応を受け入れられずに、有希子はただ慄き、声を竦ませるばかり。

そのまますうつと滑り落ちた指先は、あばらの浮いた腰上を丁寧になぞり、肩甲骨を確かめて、腰骨を軽くつつき、そのままさらに下、腿の上を滑る。

「ッ……」

薄い布地の上を無遠慮に滑る指先が、どちらかと言えば野暮ったく、広めの面積で股間をガードする下着をなぞる。閉じ合わせた太腿に力を込め、手の進入を防ごうとした有希子だが、そんな抵抗すら無駄とばかり、腕はあつさりと太腿を割り裂いてしまう。

無防備になった股間、大切な場所を包み込む下着へ、指先がついと伸びた。

（————つ、あ!!）

脚の付け根をなぞりあげる指先に、有希子は声にならない悲鳴を上げた。手首を縛られ腕の自由もなくなり、視界まで塞がれ——ほんの布一枚を隔てただけの状態で、『ゆきこ』がこね回される。

その動きは小刻みに指を震わせ、緊張に強張る乙女の抵抗をそつとほぐすような優しいなもの。未知の感覚に有希子は羞恥と共に、深い困惑を覚えるばかりだ。

（つ、なによ、なによこれ……っ!?）

毎朝の想像の中で、そうしてそこを、自分ではない誰かに触れられる事を思い描いたこともあった。しかしベッドの中での拙いひとり遊びとはまったく違う、粘つくくしいそれは、有希子のイメージする愛撫とはまるで異なっている。

執拗に、自分の性を思わせるような、失礼にも有希子が本当に「女」であるかどうかを確かめるような手つきだった。

(ツ——)

息をのむ有希子が、目隠しの下できつく目をつぶる。

抵抗すら許されないなら、せめて硬く身を強張らせ、石のようになってしまいたかった。息を詰め、怖気に鳥肌の浮かぶ手足をぴんと伸ばして、有希子は一心に心を閉ざす。

それが、功を奏したのだろうか。

しばらく少女の股間を弄り回していた指先は、やがて興味を失ったように股間から離れていった。

そもそもいくら優しく撫でられても、こんな状況で『ゆきこ』があっさり緊張を解くはずもないのだ。強張ったままの脚の隙間、乙女の秘所は固く閉じ合わされたまま、指一本入り込む隙間もない。

(あ……)

突然の解放に、有希子はわずかに安堵を覚えざるを得なかった。

しかしそれも束の間。

「きやうつ……!?」

ふいに唇を押さえこむ手が離れたかと思うと、有希子の軽い身体は、そのままなすべなくベッドの上を転がされた。塞がれた視界では天地もわからない。頭の中身がかき混ぜられるような不快感と共に、横を向いた後ろ頭と頬が柔らかいものに押し付けられる。

(つ……!?)

それが丸めた毛布であるということに気付くのに数秒。

そうして有希子は、自分の体勢を理解する。

ベッドに身体をうつ伏せに、身体を二つに折り曲げられ、さらに足を大きく開かされた姿。足を開いてしゃがみ込んだ姿勢で、そのまま地面に伏せさせられたかのような姿勢。

「つや……」

お尻を大きく天井に突き上げされられ、先程よりも一層、無防備に股間を晒した姿勢。ひやりと内腿を撫でる外気に恐怖感が増し、シーツの上に押し付けられた胸がひう、と悲鳴に似た呼吸音を漏らす。

ばたつかせようともがく両脚がしっかりと押さえつけられる。股間どころかささらにそ

の後ろの双丘までを大きく割り裂かれた姿勢は、少女の小さな身体を余すところなく暴き立てるものだ。

そして——これまで健気にも少女の秘所を覆い隠していた下着の股布が、ぐいと引つ張られたかと思うと、上下左右に引き伸ばされ、乱暴に横へとずらされる。

(み、見られ……つ)

隠していた大切な場所までもが、ついに開かされた。

未成熟な蕾のままの秘所に注がれる粘着質の視線をはつきりと感じ取り、有希子は声にならない悲鳴をあげた。もつと酷いことをされる——本能的にそう感じ取った少女の身体が強張り、薄い鳥肌が背筋に浮かぶ。

だが——

ついと伸び、肉付きの薄い少女の太腿を押し広げた何者かの指先は、硬く閉じ合わされたままの秘貝の合わせ目を素通りし、そのさらに後ろ、つん、と縮こまったもうひとつの小さな孔へと触れる。

(え、あ、……う。……な、なに、して……ッ)

最初はただの気のせいと思うとした有希子だが、指がくにくにとそこを執拗に突き回し、わずかに縮こまったすぼまりの皺を丁寧になぞってゆくのを感じて、それが考え違いだったことを知る。

息を詰めた少女の脚の間で、しつとりと湿った指先は、丹念に少女の後ろ孔を愛撫し始めていた。

（そ、そこ、違つ……さ、触っちゃダメ……っ!!）

まったく予想していなかった場所を弄られ、有希子の思考はパニックに陥った。これに限れば教科書どおりの理解しか持っていない有希子にとって、そこを使う行為は、乏しい性知識にはまったくくないものである。

（そ、そこ、おしりの、あな……ッ）

“その場所”はトイレを済ませるためにだけある不浄の場所であり、身体を洗うときか、必要に迫られる時以外には、まず触れることも意識することもない場所だった。

しかし指はそんな孔を容赦なくこね回す。外からの刺激に反応してぶくり、と盛り上がったすぼまりを指の腹が押し込み、断続的に爪弾くようにして、とん、とん、と微弱な圧迫を繰り返す。

じんつ、と響くむず痒いような感覚を、有希子は困惑と混乱の極地の中、受け止めざるを得なかった。

「っ、あ、……ッ」

声を上げまいと、少女は懸命に歯を食いしぼる。敏感すぎる小孔への刺激は、耐え難いほどの嫌悪感と不快感を有希子にもたらしていた。

『そこ』は、たとえ愛する相手のものでさえも触れることも、目にすることも躊躇うような場所のはずだ。それなのにこの得体の知れない指は、少女の小さな孔を何度も擦り、押し揉むように断続的な刺激をくわえてくる。

しかし。

当の有希子は気付いてすらいないが、数週間にわたって3食の食事をほぼ栄養補助食品とゼリー飲料でまかなっている少女の身体は、消化管のほぼ全てにわたってにも余計な内容をほとんど残して居らず、その内部はどこまでも実に綺麗なものだのだ。

いつそ好都合なほど、有希子の『そこ』は異物を受け入れるための準備を整えていたのである。

指は秘所に隣接する小孔を丹念にこね回し、次第に大きくヒクつき膨らみ、大きく反応をみせるそこから、少しずつ未知の感覚を引き出してゆく。

(ち、違う、こんなの、こんなの違うッ!!)

わずかに力の籠められた指先が、ぷくりと盛り上がった排泄孔に押し当てられた。指先はくち、くち、と蠢きながら強張った肉を押し広げ、徐々にその先端をドーナツ状の括約筋の中心部へと食い込ませて行く。

次第に引き伸ばされる後ろ孔への刺激に、有希子は背筋を震わせた。

(やめて、そんなとこ弄らないで……ッ!? は、排泄の、排せつの孔なのに……な、な

に、何してるの、何してるのよお……)

男に犯されるということだけならば、初心な有希子にも知識としてないわけではなかった。しかし、性器ではなくそんな不浄の場所に執着を覚える相手の意図がまったく理解できず、有希子はただ恐怖に身体を凍ませるばかりである。

けれど声を荒げれば、それこそもつと酷い目に遭わされるかもしれない——視界を奪われた恐怖は少女を縛り付け、繰り返される行為にただじつと耐えるしか選択肢を与えていなかった。

「つあ、だ、だめ、だめッ……」

もともと、“そこ”は日常的にモノが吐き出されてゆく部分だ。未使用の処女地よりもほど柔軟にできていることは間違いない。排泄という行為に何千回と使われた後ろ孔は、丹念な愛撫によつて緊張の強張りをほぐされ、次第に緩みはじめてゆく。

そしてついに、ぬるう、と指先はすぼまりの奥へ押し込まれていった。小さな孔を押し広げ、指が少女の体奥へと出入りを始める。

ドーナツ状の括約筋をくぐり、前後する指先——その先端が軽く曲げられ、体の内側、直腸粘膜を直接、なぞるようにこね回す。

「ツツ……!?!」

“出す”ための孔から異物が侵入し、体内をす途方もない嫌悪感。胸の中から空気を

搾り取られ、有希子はシートを掴み歯を食いしばって込み上げてくる不快感を堪える。強張った下半身は有希子の意思とは無関係に硬直し、抽挿を繰り返す指を強烈に圧迫していた。押し込まれた指をまるで食いしばるようにきつく締め付ける後ろ孔は、かえってそのせいでより敏感に、直腸を陵辱する異物を感じ取ってしまう。

（い、痛いっ……、ゆび、いれない……でえ……っ!! ……さ、裂けちゃうッ……、おしり、裂けちゃうッ!!）

有希子にしてみればまるで生木の杭を打たれているような、そんな気分ですらあった。不浄の場所と大切な場所という違いこそあれ、そこは少女にとって侵さざる聖域。そこに異様な執着を見せる相手の意図が理解できず、ただひたすらに首を振って、儂い抵抗を主張する。

しかし一度侵入を果たした指は、小孔の新たな使い方を有希子の身体に覚えこませるように、呆れるほど丁寧に出し入れを繰り返した。

「……、つぶ、……う……あ……」

ぬぷり、ぬちゅっ。

いったん深く押し込まれた指が、勢いを付けて引き抜かれる。括約筋の粘膜がめくれでは、腸液がぷちゅっつと小さな糸を引く。執拗に排泄孔が弄ばれるにつれ、有希子の下腹部には、ジンジンとしたひり付くような熱がこもる。次第にその熱が孔からその周辺

部へと拡がっていった。

首筋にしつとりと汗が浮かび、断続的な苦しげな呻きも、いつしかわずかに鼻にかかったものへと変わり始めていた。不安定にゆれる少女の口元は、時折きゆうつと何かを堪えるように下唇を噛む。

「っ、うく……っ、っは、っ……」

繊細な少女の未発達な性感は、こうした耐え切れない苦痛を別の刺激に変換して受け入れる作用をもつ。

いつしか、少女の身体へと出入りする指の動きにはリズムがつき、硬く食いしばられた孔へ押し込まれる指が、引き抜かれると共にちゅぶ、と粘液を絡ませるようになっていた。異物の侵入に反応して直腸粘膜はとろとろと保護のための液を溢れさせ、それは薄く盛り上がったピンク色の粘膜をほころばせるに至る。

孔をこね回す指の動きもにち、にちと粘つく音を立てながら次第にスムーズなものになり、そこへの侵入を滑らかに受け入れていた。

(っ……、やだあ……ツツ……)

徐々に“そこ”での行為を受け入れ始めてしまっている自分の身体に、有希子は戦慄を覚える。異常極まりない行為を、ひとつの理解可能な刺激として認識してしまうことそのものが、潔癖な少女にはあまりにも受け入れがたい事実だった。

「はくうううう……ツツ?」

不意に、挿挿が激しさを増す。緊張する下腹部の警戒が緩んだのを見計らったかのように、小孔の入り口付近で前後していた指が力強く腹奥へと突き込まれ、さらには大きくうねり曲がった深部の直腸粘膜をぐいぐいと押し上げる。

「っ、あつ、やあ、苦し……やめてえツツ!!」

ずんつ、と重い鉛の塊を押し込まれたような衝撃に、下腹部が身体の内側から圧迫される。触れられたことも無い場所を無理矢理に捏ね上げられる刺激は、少女には耐え難く、有希子は押し付けられたベッドの上でびくびくと背筋を反らせた。

指は柔軟に曲がり、また伸び、円を描くように細い入り口をかき回し、よじれた後ろ孔の皺皺を丁寧にごね上げる。白く丸い双丘もそれに合わせてごね回され、硬く強張っていた尻肉も、ほんのりと色づきパン生地めいた柔らかかさ、うっすらと汗ばむほどの色艶を与えられていた。

にちゅ、くちゅぷ、と音を立てて膨らみ、盛り上がる滲み出した粘液は荒々しい刺激を少しでも緩和しようとさらに潤沢に溢れ落ち、とうとう指に絡み付いてくるほどになつていた。

白く泡立つ直腸粘液が押しこねられる二つの肉鞠の隙間にあふれ、柔らかく下ごしらえされた少女の下腹部をいやらしく彩る。

(な、なにこれ……っ)

指の出入りに合わせて、ぞぞぞっ、と背筋を得体の知れない感覚が逆流する。背骨を伝わる微弱な電気信号が頭の奥でぴりぴりと跳ね、有希子の思考を優しく浸してゆく。

伸縮する直腸を探る指の抽挿が繰り返させるにつれて、徐々に下腹部の更に下、これまで意識もしたことのない、恥骨の上と脚の奥に、じんわりとした鈍い澱みのようなものが凝り、集まって行くのが感じられた。

(お、おなか……へんに……っ)

排泄欲とは明らかに違う、別の何か。溶けた鉛か蠟でも流し込まれたように、重く熱いものが腹部に溜まってゆく。弱まることなく膨らむその感覚をどうしていいか分からずに、有希子は困惑するばかりだった。

それでも、声だけは上げないようにと、必死になって歯を食いしばる。

だがそんな些細な抵抗も、すぐに打ち破られることになった。

「え……」

ペとり、と、尻肉をこねていたもう一方の指先が少女の双丘を掴み、ぐいと左右に押し広げる。同時ににちりと音を立て、今なお深々と細孔に埋まる指先の傍にもう一本の指が触れた。

(っ……!?)

驚く暇も無い。背筋を走り抜ける戦慄に続いて、二本目の指が有希子の後ろ孔へと押し込まれてゆく。

いくら馴染んだといつても外からの挿入は今日がはじめての経験である有希子に、それは想像を絶する刺激だった。たかが倍に増えただけの指にちいさなすぼまりは押し広げられ、ドーナツ状の盛り上がりを見せる括約筋はちくんと鈍い痛みすら伴う衝撃に貫かれる。

「あぐ……ツツ!? つ、あ、や、やめつ、痛い、痛い……!! は、入んないつ、そんなのダメつ……ぬ、抜いてえ、ヘンなことしないでえ……!!」

声を上げてわめく有希子だが、それによって責め手が態度を変えることなどなかった。バタつかせる手足は硬く拘束されたまま、少女の孔へと押し入る指はいっそう深く少女の体内をえぐり、強引に引き開けてゆく。

そして更に。まるで出口の伸縮を確認するように、這入り込んだ指はそのまま少女の後ろ孔を左右にこじ開けた。

「あ、あう、かは……あつ」

ねとりと腸液が糸を引いて溢れる。

小さな孔はひしやげた格好のまま指によって押し開けられ、とうとう狭い入り口にばかりと空間を作ってしまった。左右の指によって細孔を締め付ける括約筋は楕円形に引

き伸ばされ、二本の指の間に空隙を空けてゆく。

(つあ……う?!)

腹奥にぞろりと侵入する外気の冷たさに、有希子は背筋を震わせる。

今ならば、押し広げられた指の間、振り合わされた直腸の中を奥まで覗き込むことも可能だろう。まさに自分がそうされているのではないかという想像が、少女の心を支配してゆく。

「ツひろげちゃ、ダメえ……!! み、見ないでツ、おしりの、ナカなんか、見ないで……ツ!!」

穢くて、汚れていて、触れることすら許されなくて、まして絶対に誰にも見せてはならない場所——

そんなところを執拗に弄り回す相手の意図が、有希子はまったく分からない。世の中には、そんな場所をも使って悦楽を愉しむ方法があるのだなどは、純粋な少女にはまるで思い至らないことだった。

(そ、そこ、排せつの、あな……だから……き、汚いのっ……い、いじっちゃだめなのっ……ダメなのにい……っ)

しかし——当の有希子の危惧に反して、そこは綺麗なものだった。吸収効率のいい栄養食品ばかりの偏った食生活は、少女のそこから不浄のものをすべて取り払ってすらい

【奥付】

「少女有希子・暗闇の肛姦遊戯」 体験版

発行:平成 23 年 10 月 1 日

制作:良い子の諸君!

※作中の登場人物、組織、施設等は
すべて架空のものです。